

現代日本における学問誕生の契機

京都大学大学院 農学研究科

船木みあさ

一 はじめに

「いま日本で哲学ということ」というテーマが昨年、ワークショップで取り上げられた。この事実を注視したい。静かで熱い議論の中、哲学と科学は分かち難く結びついている。ということに関しては意見の一致が見られた。この一致をもとに、現代日本において、日本人の柔軟な思考力と澄んだ観察眼を端緒とする学問の誕生を模索した。

本発表では、この学問とはどのようなものか述べることを目的とする。

二 「知を愛求す」という内面的な働きを現生人類は等しく共有している

ピロソピアが「知の愛求」を意味するならば、人類が持ち得る内面的な働きによる賜の一つと考えられる。

「知を愛求す」という内面的な働きを、人類がいつ、持つようになったかは定かではない。しかし、前段階として「知りたくて惹きつけられる」という内面的な働きを想定すると、これは野生チンパンジーにもみられる。例えば、マハレを調査地として現在、チンパンジーを研究している中村美知夫によって、チンパンジーの母親がオオアリ釣り¹をしている手付きを彼女のアカンボウが覗き込む様子が観察、記録されている²。これは「知りたくて惹きつけられる」という内面的な働きのあらわれとみることができる。

人類に最も近い種であるチンパンジーが「知りたくて惹きつけられる」という内面的な働きを持つということから、人類とチンパンジーの共通祖先もこの内面的な働きを獲得していたのであり、よって、人類は誕生した当初から、「知りたくて惹きつけられる」という内面的な働きを持っていたということが推測される。

地球上に現存している人類はホモ・サピエンス一種のみである。おそらく、一つの集団としてアフリカで「知りたくて惹きつけられる」という内面的な働きを持って誕生し、ある程度のまとまりで新しい集団となって地球上に分散して行ったに違いない。

「知りたくて惹きつけられる」という内面的な働きから「知を愛求す」という内面的な働きへの展開的な継承について考察する。

ピロソピアという言葉が表している内面的な働きは、古代ギリシアで誕生したと考えられ、現代の日本人が全く同じ内面的な働きを持つわけではないであろう。これは、同所で同時に二人の人が同一の事を経験したとしても、各々の受け止め方が違うのと本質的に同じである。しかし、この二人は、共有できる受け止め部分、ベン図的に言うならば、二つの円が重なり合う部分から推しはかって、重なり合わない部分を察することも出来るのである。同様に、現代の日本人が古代ギリシア人の内面的な働きと重なり合うところを糸口に、ピロソピアという言葉が表している内面的な働きを理解することも出来るのである。

地球上に分散した全ての集団について同じことが言える。そして、古代ギリシア人の描く円、現代日本人の描く円といった、それぞれの集団の描く全ての円の重なり合うところにある内面的な働きの一つに、「知を愛求す」という内面的な働きがある。何故なら、言葉を使い始めたばかりの赤ん坊が、手にした物をしばらく眺めた後、近くにいる大人に見せながら、「なに。」と尋ねるのは、知的好奇心、「知を愛求す」という内面的な働きの萌芽と見ることが出来るからである。

日本人はピロソピアという言葉を知ることによって、もともと、自身の内にあった「知を愛求す」という内面的な働きを意識的に自覚したということだと考える。

「知りたくて惹きつけられる」という内面的な働きが展開的に継承され、「知を愛求す」という内面的な働きを持つようになったと考えているが、どのような経緯であるかは、わからない。しかし、その連続性に関しては、人類の外面的要素である形態面での連続性が容易に認められている点を指摘したい。つまり、人類であるか否かの一つの判断基準として、二足歩行をするか否かが取り上げられるが、大型類人猿との共通祖先による不完全な二足歩きから人類の完全な二足歩行へと、骨格に関する連続性は視覚的にわかりやすく、認められているにもかかわらず、内面的な働きの連続性となると、見解は別れるのではないかと思われる。しかし、内面的な働きの過去との連続性を認めない限り、現代の私達は、過去の人達が遺してくれたことを理解することも、私達の遺すものを未来の人達が理解することを望むことも、さらには、隣にいる人に意思を伝えることさえも出来ないのではないだろうか。

現生人類が誕生した時、既に獲得していた「知りたくて惹きつけられる」という内面的な働きから、「知を愛求す」という内面的な働きへの連続性があるからこそ、人類は未来を思い描くことも出来るのだろう。

現生人類は「知を愛求す」という内面的な働きを等しく共有しているのである。

三「知を愛求す」という内面的な働きの日本人的展開

自然を見る時、人によって見え方が違う。

目の前に広がる自然を何らかの形で表現する時、各人自身の内面が反映される。見たままのものを表現しているようで、実は、それまでに習熟していることを表現していることが多い。それまでの自身の枠を越えた表現をするのは、なかなか難しい。例えば、子供の頃、目の前にある花を描いているはずなのに、白い紙には、それまでに自身が、何度も何度も描いて描き方も知っている花を描いているという経験をしたことは、誰にでもあるように思われる。

自然観察の難しさは、正に、そのようなところにあると思われる。自身の目だけを頼りに見ようとしても、目の前には単調で見飽きた世界が広がるばかりで、自身がそれまでに知っていること以外は何も見えていないという焦燥に駆られるのである。

生まれ育った環境によって、自然の見え方は幾分規定されてしまっている部分がある。

日本人の自然観をあらわす一例として、約70年前に京都大学で始まった、サル社会に、個体識別という方法を使って入ろうという試み、いわゆる「サル学」がある。

サル学では、顔だけで個体を識別し、名前をつけることで、それまで、サルというひとかたまりにしか見えなかった動物群を、一個体、二個体といった、個性豊かな別々の個体として把握していくのである。ある個体に目を付けて観察していると、その個体を取り巻くやり取りが見えてきて、サル社会のしくみがわかってくるのである。

サルを顔だけで個体を識別することそのものが、当時の欧米人に疑われるなど、サル学だからこそ経験せざるを得なかったむずかしさがあったという³。しかし、現在、顔だけで個体を識別するのは、欧米でも基本とされる観察方法になった。

このように、個人差に加え、日本人と欧米人とでは、自然の見方が異なるところがある。日本人目線で自然観察する時、欧米人目線の自然観察の偏り、更にそのために、自然理解がはばまれている要素までも、時に、気づかされる。当然のことながら、欧米人目線も、日本人目線と同様、それぞれの歴史、文化を反映している一つの目線でしかないのである。

自然の理解は、瞬時に進むものではなく、より矛盾のない、より多くのことが説明出来る方へ、たいていゆっくりと、時に、閃きを持って修正されながら、つくられていくものである。観察者が自身の生きている時空間からの影響を受けずに観察するのは難しく、自然観察の誤りは、致し方無いようにも思われるが、注目すべきは、誤りを見抜く人がいる。ということである。

誤りを見抜けたのは、特別な能力を持った人の特殊な技ではなく、見抜くに至るまでの必然的な流れがあったのであろう。

恐らく、この流れの源は、誤った観察がなされる前に既にあった。もしくは、地理的に十分離れているところにあった。と、考えざるを得ない。何故なら、誤りの影響を知る必要があるからである。当然のことではあるが、ある誤りを見抜けた人が、別の場面では誤るということはあり得る。

日本は、地理的にヨーロッパから離れている。結果として、日本人がヨーロッパ文明を広く学び始めたのは、主に、哲学という訳語が日本で考案された頃からであろう。もちろん、現在、日本人はヨーロッパ文明の影響を受けている。

日本人のこの立ち位置の微妙さは、哲学という訳語をめぐる議論にも見られる。哲学という訳語が考案された当時、全体が把握されていたとは考えにくい。現在から見ると、非常に限られた部分を指した訳語であったであろう。しかし、この非常に限られた部分が窓口になり、後続の研究者達はその奥深さに吸い込まれ、気がつくや大海原に漕ぎだしていたのではないか。そして、哲学という訳語に違和感を覚える研究者もいるであろう。

そこで、今ここで、敢えて、哲学という訳語の意味する内容を、この言葉の考案時に指した内容。と、定義する。すると、定義上、日本に哲学は無い。日本にあるのは、日本列島に移り住んだ人々が自らの歴史、文化を編み出した内面的な働きである。

日本列島に移り住んだ人々が自らの歴史、文化を編み出した内面的な働きがどのようなものであるか考察する。

一つの手がかりとして、日本神話を見てみる。それは分かりやすく、微笑ましいほど素直ですんなりした筋書きで、説得力は無いが納得のいく内容である。

日本神話に流れるのは、皆が頷いて聞ける筋を通す姿勢、言い換えれば、表面上の違いにとらわれず、柔軟に対処して合意できそうなところを見極め、まるくおさめて事を運ぶのを好む傾向である。

この傾向のおかげで、日本人は古くは中国文明を、新しくはヨーロッパ文明を取り入れ、消化吸收し、自らのものになっているのだろう。例えば、日本人は中国人から縦書きを、ヨーロッパ人から横書きを学び、いわば縦書きと横書きが交わる所で両者の書き方を操り、自らを表現する手段に成し得ていることがあげられる。

日本人は縦書きと横書きの交差地に居る。という言い方をしても良いかもしれない。

地球上に現生人類は誕生し、時とともに、ある程度の集団となって分散して行った。そして、その先々で各々の集団の歴史、文化、そして自分達のルーツの説明を一つの目的とする神話を持ち、思想を持つようになった。そして各々の集団は自分達の円をつくっていく。

日本人がつくる円には、縦書きと横書きの交差地が含まれている。そして縦書きと横書きの交差地は地球上に分散した全ての集団がつくる円の重なり合うところを含んでいる。

日本人がつくる円の中で、他のどの集団のつくる円とも交わっていない部分が、他の集団との違いであり、他の集団と区別出来る日本人らしさをあらず特徴である。この特徴は魅力でもあり、また、他集団から嫌悪され、摩擦を引き起こす部分でもある。

日本人がつくる円の中で、他の集団と交わる部分は、共感を引き出し、理解し合える部分である。この部分を頼りにして、重なり合わない部分の理解を試みるのである。

ピロソピアという言葉が表している内面的な働きは古代ギリシア人がつくった円の内にある。そして、日本人がつくっている円と重なり合うところ、全ての集団がつくる円が重なり合う核心部の要素の一つに「知を愛求す」という内面的な働き。という要素がある。

日本に横書きが伝わった頃、日本人はピロソピアという言葉を知った。それまで知らなかったこの言葉を理解するのに、この言葉があらわしている内面的な働きの核心、つまり、それまで日本人の内面にあるものの意識されていなかった「知を愛求す」という内面的な働き、を頼りに、理解しようと努めたであろう。このようにして、日本人は始めて接する異文化をも理解してきているのであろう。

日本人だけではない。地球上の全ての人々は、「知を愛求す」という内面的な働きを共有するため、人は時空間に関係なく理解し合え、合意することも出来るのであろう。

縦書きと横書きの交差地に居る日本人という捉え方をする時、それが出来たのは、「知を愛求す」という内面的な働きが、皆が頷かざるを得ない筋を通そうと求める内面的な働きへと日本的な展開を遂げたからである。と考える。

四 現代日本における学問誕生

どうしたら良いのかわからない。これまでの自身の生の内に、これからの自身の生のあり方の礎となるものがあるはず。と、思う。それを求め、どのくらいさまよったろう、手に触れたものがある。手探りでそれが何か確かめようとする。次第に輪郭が見えてくる。東の空に、紫色の白く細い雲が、たなびいていた。

人類が自然の一部であることは、人類の誕生当時と寸分も変わらない。地球上に分散したそれぞれの集団が、それぞれの集団の住処となった自然と関わり合いながら、どのように生きていけば良いか模索し続け、現代に至るのであろう。

日本列島に移り住んだ人々が日々たずさわっている自然では、生き物はすくすくと育つが、天災が頻繁に起こる。日本人はそういう自然から学んだ。ヨーロッパ人とは、自然を見る目も、接し方も異なる。自ずと自然観も異なる。日本人はこの日本という自然で生きていく術を身につけ、伝えてきた。育まれるのは、法則を見破る能力より、経験を活かす能力に違いない。

日本において、自然は容赦なく一面を潰していく時がある。

涙も出ない。

しばらくうつ伏せた後、両手を引き摺りながら顔を地面から離そうとする。地面に生命を感じ、鳥の声が聞こえる。自分のどこかに甘さがあったのではないかと思う。辺りを見まわす。

自らの思いに浸る余地は無い。

何も考えられなくなった頭のはずなのに、何故かそばにいる人を思いやって、何とかしよう、動こう。と、思う。

いつの間にか地面は緑になり、カエルの、セミの、コオロギの音が時の移ろいを伝え、警戒心のない鳥のヒナが歩いている。ふと、精神的に強くなった自身に気づく。

このような日本の自然との関わり合うことで得た経験から、つまり、様々な生命の調和を見せてくれる自然、時にそれらを全て破壊し、皆と手を携えることを余儀なくする自然の両面から、日本人は皆が領かざるを得ない筋を通す平衡感覚を保てる内面的な働きを育んできたのであろう。

日本に縦書きが伝わった時、この平衡感覚を保てる内面的な働きによって、縦書きを消化吸収し、自らを表現する手段にした。表現しているのは日本人の内面である。

時を経て、今度は横書きが伝わった。

日本人はかつて縦書きが伝わった時とは異なる困惑を見せながらも、皆が領かざるを得ない筋を通す平衡感覚を保てる内面的な働きによって横書きも学んだ。当時の表記を見ると、既に書き方の基本型となっていた縦書きとの平衡を保とうとした様子がうかがえる。

例えば、——本日——と書いて「にっぽん」と読む。つまり、縦書き二列と考えるのである。現在では横書き一行と考え、「ほんじつ」と読む。

この推移の過程で、日本人は論理的な影響を受けたと推測される。

つまり、日本人は流れるように文字を縦に書くだけでなく、滑るように文字を横にも書くようになった。表現の仕方が思考に影響を及ぼすかわからない。しかし、数式を縦書きにして論理を展開するのは難しいように思われる。

時を経て、日本人は横書きも縦書きと同様に操り、自らを表現する手段にした。表現しているのは日本人の内面である。

現在の地球上に目を向ける。横書きも縦書きもあることは、広く知られている。

それを対立軸とすることも出来ようが、皆が領かざるを得ない筋を通す平衡感覚を保てる内面的な働きでもって、縦書きと横書きの交差地に居るということを模索し、日本人のあり方に解を見出すことも出来よう。

現生人類が地球上に一つの集団として誕生した頃、一度は、集団内全ての構成員で合意をした経験があるのではないかと、思われる。

事実、現実として、現生人類は様々な合意を地球規模で成している。これは、過去に集団内全ての構成員で合意に基づいて生きた経験があることの証拠と見なせ、かつ、皆が領かざるを得ない筋を通す平衡感覚を保てる内面的な働き、が具体化されている。と、見なせるのではないかと考える。

それ故、皆が領かざるを得ない筋を通す平衡感覚を保てる内面的な働きは、日本人に特有のものでは無く、全ての集団がつくる円の重なり合うところの一つの要素と見なせると考える。ただ、この内面的な働きが、日常にどの程度浸透しているかの違いが集団ごとにある。

日本は、海によって他国とある程度の地理的距離があるという条件と、先に述べた日本の自然条件があいまって、現生人類が誕生した際に持っていたら皆が領かざるを得ない筋を通す平衡感覚を保てる内面的な働き、が増幅し、阿吽の呼吸となるまでに発達的に継承され、結果として縦書きと横書きの交差地に居るのだろう。ところが、同じ条件のために、自国を外から眺めるという機会そのものが、極、最近まで少なかった。このことは、自国の理解を深めるには、不利に働く場合がある。さらに、他国から影響を受けているのは分かっても、自国が他国に影響を及ぼしていることに疎く、自国のことを説明するのに慣れていないように思われる。

通信手段、交通手段の急な発達により、地理的な距離がなくなりつつある今、日本人は、縦書きと横書きの交差地に居るといふあり方が、全ての集団がつくる円の重なり合うところの要素である「知を愛求す」といふ内面的な働きの日本的展開によって、皆が領かざるを得ない筋を通す平衡感覚を保てる内面的な働きへと発達的に継承したことによるものであり、地球上に現生人類が一つの集団として誕生した頃、一度は、集団内全ての構成員で合意をした経験があると考えれば、自然なあり方である。という発信を日本人らしい方法でも良いのではないか。

以上、日本列島に移り住んだ人々が、柔軟な思考力と澄んだ観察眼をもとに自然と関わり合いながら、どのような内面的な働きを育んできたと考えられるか述べた。このような考察を積み重ねていくと、漸う、日本列島に移り住んだ人々が自らの歴史、文化を編み出した内面的な働きの広がりや奥深さによる学問の姿があらわになると考える。

「いま日本で哲学すること」といふテーマが昨年、ワークショップで取り上げられたという事実を、哲学という言葉では十分に表現しきれていない日本人の内面的な働きをあらわしたい。という欲求の現れと見ることは出来ないだろうか。

この仮定に、幾分でも、妥当性があるのならば、その欲求を満たす学問が誕生する契機が既にある。と、見る。

古代ギリシアで、「知を愛求す」という欲求が古代ギリシア的展開を見せ、ピロソピアーが誕生したのならば、日本において、今が、日本人の内面的な働きを十分に表現したいという欲求が現代日本的展開を見せ、学問が誕生する時である。と考える。

果たして、古代ギリシア人が 2500 年以上も後、ピロソピアーに魅せられる日本人がいると知っていただけるか。結果として、そうなった。ということであろう。そうであるならば、現代日本で学問が誕生し、2500 年後の未来ギリシア人が、日本で誕生した学問に魅せられるということがあっても良いのではないか。

現代日本における、まだ命名もされていない学問誕生の契機である。

五 むすび

和食が無形文化遺産となり、日本文化に対する関心も高まりつつある。

日本人は自身のことを海外の人達に、責任を持って語ることが求められつつある。これまでの「あいまいに微笑む」段階から、「微笑む心の内」を表現する段階に来ていると考える。

註

- (1) オオアリ釣りとは、マハレに生息している一定年齢以上のほとんどのチンパンジーが行う採食行動である。オオアリの巣穴に、樹皮を剥ぐなど加工した枝や未加工のツルといった柔軟性のある釣り棒を差し込み、オオアリが噛みついたところをゆっくり釣り上げ、食す。2歳で挑戦し始め、1~2年試行錯誤を重ねた後、出来るようになる。
- (2) 京都大学全学共通科目「自然人類学Ⅰ」の講義で中村美知夫准教授が自身の観察として紹介しているビデオによる。観察者が、顔だけで個体を識別し、同所同時的に観察動物の社会に即座に入るといふ、サル学特有の発想による観察方法を採用していることを重視し、この観察を取り上げた。

一般に、自然観察において、断片的に切り取られた場面だけでは、観察内容を的確に判断するのは難しい。マハレの調査地では50年以上に渡る長期研究が行われて

いることにより、この時観察された個体がどのような成長過程にあるかわかっているため、導けた判断である。

なお、サル学は、今西錦司によって始められ、霊長類社会の理解を目的としていた。

- (3) 中村美知夫『「サル学」の系譜 人とチンパンジーの50年』と、註(2)と同じく「自然人類学Ⅰ」の講義内容による。

なお、中村が「欧米」という表現を使っているため、それに習い、サル学に関しては、本稿でも「欧米」とした。